

令和 7 年度

横浜国立大学教育学部学校教員養成課程

帰国生徒選抜 試験問題

小論文試験

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙には受験番号を必ず記入してください。
3. 一時退室はできません。トイレの使用は監督者に申し出てください。
4. 試験終了の指示があったら、解答を続けてはいけません。
5. 下書きをする場合は、下書き用原稿用紙を使用してください。
6. この問題冊子及び下書き用原稿用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

ぼくがこどもの哲学に出会った当初抱いた期待は、こどもの哲学は、問いを問いあう文化、自分で考え、他の人々とともに考える文化を学校につくことに役立つのではないか、というものだった。その期待は、今も変わっていない。そのような文化が育てば、これまでの学校の息苦しい不幸なあり方は、変わるだろう。それが、20年の歳月を経て、変化の兆しはみられるものの、相変わらず期待のまま留まっていることには、悄然とせずにはいられない。しかし、とにかく、希望を込めて哲学対話のこれからを語ろう。

（中略）

学校が息苦しい不幸な場所になっていることを象徴する事象が、校則をめぐる喜悲劇である。学校は、往々にして、理由のよくわからない校則が氾濫する場所であって、こどもも^{きょうくつ}窮屈だろうが、それを守らせようとする教員の苦労も並ではない。校則をすり抜けようとする児童・生徒と守らせようとする教員との間で繰り広げられる、文字通りのいたちごっこは、喜悲劇としか言いようがない。その結末は、教員を^{むしば}蝕む徒労感と教員とこどもの間にわだかまる不信感である。

しかし、ほんとうに深刻な問題は、校則をめぐる悲喜劇そのものにあるのではなく、その背景にある、問いを問いあわない文化、問いを封じる文化にこそあるのではないだろうか。なぜそのような規則があるのか、なぜそのような規則に従わなければならないのか、というまじめな問いは、教員によっても生徒によっても、まず問われないし、問われたとすればたちまち封じられる。

しかも、問いを問いあわない文化は、学校の生活指導を支配しているだけではなく、学習指導をも支配している。問いを問うことが知的活動の基本であることからすれば、驚くべきことだが、授業中の教室にすら、問いを問いあう文化は希薄である。大学の初年次の哲学の演習授業で、毎年聞かれる感想の一つは次のようなものだ。「こんなに問いを問いあい、意見を交わしながら考えるのは初めてだ」。1970年代に高等学校に通ったぼくの世代ならばともかく、学習におけるコミュニケーションの重要性が説かれ、総合的な学習の時間が導入されて久しく、さらにアクティブ・ラーニングなどの教育手法が注目を浴び始め

た 2010 年代の高等学校の生徒の感想である。問いを問わない教室の文化は、何十年も変わっていないのである。これは驚くべきことである。

そして、問いを問わない文化、問いを封じる文化が招く息苦しさは、学校だけではなく日本の社会全体を覆うものであるように思われる。中島義道は、問いを封じ、「優しさ」と「察し」を美德とする文化が、感受性の異なるマイノリティを抑圧する様を見事に描き出している。問いを問わない文化、問いを封じる文化と、高い同調圧力、「空気を読む」風潮との間には密接な関係があると思われる。中島は 1990 年代の日本社会を踏まえて論じているのだが、2020 年代を迎えようとしている現在も、事情はそう変わっていないようだ。

こどもの哲学をはじめとする哲学対話は、学校だけでなく広く社会に問いを問う文化を創り出し、息苦しさを和らげることに貢献するのではないだろうか。この意味では、ぼくがこどもの哲学に期待することは哲学カフェに期待することと重なる。学校を中心として子どもたちと共に行う哲学対話が、教育現場に対話の文化を創り出すとすれば、街角を中心としておとなたちと共に行う哲学対話は社会のさまざまな現場に対話の文化を創り出すのである。その意味でも、哲学対話は狭く学校教育に限定されない教育の手法なのだ。

（中略）

哲学対話の本性として次のものをあげることができるだろう。

- （１） 哲学の方法は対話しかない。つまり、自分で考えかつ他の人と共に考えるしかない。
- （２） 当たり前とされていることを問い直す。つまり、自他の意見の前提や自己の生や社会の基盤を問い直し、よりよいものへと改訂していく。

（中略）

問いを問う文化があつてこそ、学校は道徳性や市民性を養うのにふさわしい場になることはもちろんのこと、学力を養うのにふさわしい場にもなる。そして、それとともに、学校は息苦しく不幸な場であることから解放されていくだろう。しかし、学校自体がそのように変容することは、絶望的に困難であるようにも思われる。それは、現行の学校制度を変革することにまつわる難しさだけではない。近代の学校制度が内包する根本的な難しさでもあるように思われるのである。

（中略）

学校におけるコミュニケーションは、評価を基本にしており、「設問－応答－評価」という形態をとる。そして、「設問－応答－評価」というコミュニケーションは、個々の教室におけるコミュニケーションを規定しているだけでなく、教員－生徒関係、「教える－学ぶ」という関係の根底にあって、近代の学校教育のあり方を規定している。というのも、授業で課題を与えそれに対する応答を試験で評価するという「設問－応答－評価」のコミュニケーションこそが、学校を成り立たせているからである。そして、ルーマンによれば、学校教育にとって本質的なことは、評価可能で選抜の材料となるということであって、何が教育されるかは付^{よた}滞^{てき}的（原文ママ）なことではない。

これは、日本に限らず、近代の学校一般に当てはまることであるが、日本ではこのような学校の性格が、「受験体制」という際立った形で固定化されてきた。そこでは、単純で一面的な評価の尺度が共有されており、その尺度に従って、あらゆる生徒の序列を決定することが可能であり、また、生徒が進学する学校の序列を決定することが可能である。そういった尺度の一つとして定着したのが「偏差値」である。「偏差値～の学校」という言明は、それ自体をとってみれば無意味な言明だが、日本の学校文化の中では単純で一面的な尺度の代用として通用しているのである。その尺度による序列を内面化した生徒たちは、自ら進んで自分を「受験生」と見なし、その序列に従って自分を評価し、その中で少しでも高い位置を得ようと自分を「規律・訓練」する。日本の「受験体制」という選抜システムは、さながらフーコーのいう「パノプティコン（一望監視装置）」であるかのようである。

（中略）

学校というものが、たんに評価し選抜するためのものではなく、こどもたちが何か学ぶべきことを学ぶ場であるとすれば、そして、その学ぶべきことの中から道徳性、市民性、学力の基礎が最も優先順位の高い事柄だとすれば、それに比類ないしかたで貢献しうるこどもの哲学は、学校教育のなかにもその場をもつべきだ、と考えるのである。

（中略）

哲学対話が、学校教育を始めとする狭い意味での教育だけでなく、おとなも

含めたあらゆる人々が生きていくさまざまな場面で、互いに学びあう広い意味での教育にも通底することを本書では論じてきた。こうして哲学対話を推進していく先には、学校の「内」と「外」とが相対的に無意味となる社会が待っているかもしれない。

【出典】寺田 俊郎編著「それでも哲学対話を教育に生かす」中岡成文監修『哲学対話と教育』大阪大学出版会、2021年（一部改変）

問1. 著者の考える哲学対話とは何か、また現在の学校で哲学対話が困難となっている背景とは何か、本文から読み取り、あなたの解釈を300字以内で述べなさい。

問2. あなたにとって、まだ哲学対話にまで至っていない関係とは具体的にどのようなものであるか。そこから哲学対話に近づけていくためにはどうしたらよいと考えるか。600字以内で答えなさい。

問 1 下書き用原稿用紙

[illegible]

問2 下書き用原稿用紙

[illegible]